木乃香のペット！

桜楼月華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
木乃香のペット！

【Ｎコード】
Ｎ９６４４Ｚ

【作者名】
桜楼月華

【あらすじ】
主人公死にます。転生します。
つまりいつも通りオーケイ？

ネタ系苦手です。主に自己満足です。多分に駄文です。シリアス回多いかも？不定期更新です。蛞蝓です。

それを考慮した上で御読みください。

九尾孤の狐雪

どこ……だろ。

真っ暗な世界。

目を開けてるのか、それとも閉じてるのか。

そもそも私は起きているのか。夢を見ているのか。

「ふぅ、疲れたわい……」

そんな声が聞こえてきた。私が知らない声。

これは夢なのだろうか。

「誰……？」

それを確かめるべく、私は問うた。

ただ、これほどにまで明確な意思や思考がある以上、これが夢だとは考えにくい。

「ふむ……わしか？　わしは……まぁ、所謂神じゃよ」

かみ……？

紙……はまず生きてない。

髪だって、生きてるかどうかと言われれば生きていないはずだし……。

じゃあ、やっぱりあの神？

いやいや。ないって……。

「突然じゃが、お主は死んだ。死んだ者は生まれ変わる。輪廻転生というものじゃ」

輪廻、転生……。

「勿論、生まれ変わった先が人かどうかは知らんがな」

「ま、まって！　転生って、意味分かんないよ！　どういうこと！？」

「そのまんまの意味じゃよ。生まれ変わるんじゃ。死んだから生まれ変わる。なにも意味なんてものはない。っつーことでじゃあの♪」

「えええええ！？」

＊　＊　＊

自棄に良く聞こえる小鳥の囀りと、自棄に良く香る自然の匂いと、変な違和感が私の眼を覚まさせた。

「……」

キョロキョロと周りを見渡す。どこだろう……。

見た感じは森だ。何故、私はこんなところにいるのだろう。

変な違和感の元は、腰。

「……？」

尻尾……。

……ああ、そうだ。私は九尾の狐で、九尾だったけど何者かに襲われて……それで、逃げ込んだところがここだったんだっけ。だけど結局追いつかれて……それからは思い出せない。

それよりも気になったのは左手の甲とお腹の鈍痛。

見れば、血が滲んでいる。

こんな傷持っていたっけ？　と首を傾げると同時、尻尾が木の葉に触れて小さく「がさり」と音が鳴った。

「誰か、いるんですか？」

男性の声。

人、だろう。逃げなくちゃ。妖怪は、人にばれてはいけない存在。

人に見つからず、人に僅かな悪戯をして、それで愉悦を得て、後は平々凡々に過ごす存在。

だけど、逃げるには体力がなさすぎて、私は、ただそこにぺたりと座りこんだままその声の主が出てくるのを待った。

がさがさと。

茂みが動いた。

「なっ……！　九つの、狐の尻尾。まさか、妖怪？」

そこからメガネをかけた渋めの男性が現れた。

ぽけーっと。その男性の顔を眺める。

耳をぱたぱた動かし、存在を表した。「妖怪ですよ〜」的なノリで。

「その怪我は……」

私は、ビビって逃げてくれることを期待した。

だけど彼は、ビビることなく、私の頭を撫でた。

「んん……」

呻き声を出すと、男性の手が少しだけビクッとした。驚かせてしまったのかもしれない。

「喋れますか？」

「……」

ぶんぶんと顔を横に振って否定した。

なんせ、喉の奥になにかが引っ掛かっている様で、喋ることも吠えることもできない。

「……」

男性は、無言で私を抱えた。

男性の温もりの中、私はもう一度気を失った。

＊　＊　＊

～詠春Ｓｉｄｅ～

私は娘の木乃香と共に散歩に来ていた。

妻が死に、沈んでいた私を元気づけてくれた存在。私のとても大切な存在。

そして、私がいた世界に関わってほしくない、存在。

「っ……」

なにかが総本山の結界の中に入ってくるのが分かった。

本来ならば入れないはずの結界内へと入ってきたということはそれなりに霊格の高い『ナニカ』か、手練れのどちらかでしかない。

「御鈴。木乃香を……」

「御意」

「お父様？」

「木乃香、今から御鈴と一緒に帰ってほしい。父さん、少しだけ用事を思い出した」

頭を撫でながらそう言うと、娘は少しだけ悩んでから、大きく「うん！」と頷いてくれた。

私は愛刀を常日頃から常備している訳でもない。だが、それでも札くらいなら持ち歩いている。

手練れであろうと、霊格の高いナニカであろうと、足止めくらいならばできる。

――がさり。

小さな音がした。

風は吹いていない。ならば、それは生命体がいることの証明。

「……誰か、いるんですか？」

牽制のつもりで言った。

だが、動きはない。

こちらの動きを見ているにしては視線を感じない。

ならば、と。茂みを掻きわけ、一気に音のした場所へと足を進めた。

「……」

「なっ……！　九つの、狐の尻尾。まさか、妖怪？」

九尾の狐。

成程、それなら確かに結界に入れるのも納得がいく。

九尾は大妖怪。霊格が高くないわけがない。

……それにしては、身体も小さいし、力も弱そうだが。

耳をパタパタと動かした。

その姿に、何故か私は保護欲に満たされた。

「その怪我は……」

見れば、白い着物は朱い色に染まり、左手も傷を負っていた。

その姿に、より一層保護欲に駆られ、私はいつの間にか、妖怪を撫でていた。

「んん……」

今まで喋らなかった妖怪が喋った。

そういえば、何故喋らない？

「喋れますか？」

私は即座に聞いた。

妖怪は首を横に振ることでその答えを示した。

喋れないのか喋ろうという気がないのかは定かではないが、私はその妖怪の子を抱えた。

もしかすると、妙な術をかけられているかもしれない。

何故か「もしそうならば解かなければ」という義務感に襲われた。

やれやれ……大戦を生き抜いたサムライマスターと呼ばれた私がここまで受動的に動くことになるとは。

＊　＊　＊

～九尾Ｓｉｄｅ～

目が覚めた。

先程の様な自然の匂いは少ない。小鳥のさえずりもどこか遠くに聞こえる。

「……ここ、どこだろ……」

必死に記憶を探ろうとするが、なにも分からない。

なら、現状把握をしよう。

私がいるのはどうやら和室。

ということは、ここはどこかの家。

そして私は布団の中にいる。温かい。

「……うひゃ！？」

突然、尻尾を「わしっ」と掴まれる感触。

ビクンっと身体が震えた。

「な、なに……？」

背後を見ると、女の子がいた。

黒い髪を腰辺りまで伸ばし、和服を着た女の子。将来美人さんになることが、今からでも分かる様な女の子だった。

「あ、すまん。驚かせてしもうた？」

こくりと頷いた。

「なはは……ほんとすまん。もふもふしてたから遂、な」

「……貴女は、だれ？」

自分の髪の毛が少しだけ逆立っているのが分かった。

無意識のうちに警戒してしまう。

「このちゃん、お、怒られてしまうで？」

女の子の後ろからもう一人の女の子の声。

私はより一層髪を逆立てる。

「大丈夫やて。害はないってお父様が言っとったやん」

「せ、せやけど……」

「な、狐ちゃん。こわがらんといて。こっちおいで」

「うううう」

「な、なんかうなっとるで？」

「あ、逃げた」

逃げてなどいない。後ずさっただけだ！

等と主張する余裕はあまりないと思っていた。

部屋の襖に寄り掛かる様に下がる。

「大丈夫やからこっちおいでーなー」

「このちゃん、やっぱり危ないて……」

「せっちゃんがこわがっとるから、狐ちゃんもこわがるんやで？」

「ええ！？　ウチのせいなん！？」

そんなとき。

私が寄り掛かっていた襖が開いた。

「ぎゃふ！？」

重力に引かれ、従い、背中から倒れた。

おぅふ……尻尾が……。

「おや、大丈夫ですか？」

大丈夫！　ということを示す為に高速で立ち上がる。

そしてその声の主を見た。

「あ……」

助けてくれた人、だ。

透かさず、彼の背後に隠れた。

「木乃香、刹那君。なにか悪さでもしたのかな？」

「そ、そそそんなこと！」

「そんなことしてへんよ？　お父様。ただ、その子が怖がっちゃって……」

お父様……？

じゃあ、この子はこの人の娘なのかな。

少しだけ疑問に思いながらも、男性の背後に張り付いたまま、動きたくない。

「えっと……名前とかどうしましょう」

どうやら、いろいろ説明でもしようとして私の名前が分からないことに気付いたのだろう。

「……九尾」

私に名前などないから、そう答えるしかなかった。

「え、えっと、じゃあ九尾。紹介しよう。この子達は私の娘とその友達、木乃香と刹那君だ」

じっと二人を見つめる。

木乃香と呼ばれた方は、少しずつ私に近寄ってきて……。

――ぽふん、と。

頭を撫でてくれた。

「ええ子やええ子や」

「うううぅ〜……」

こんなはずじゃあ……。

でも、この子の手はなんか気持ちが良い。まるで、癒される様だ。

「さて木乃香、刹那君。私はこの子と少しだけ話があるから、外で遊んで来なさい」

「は、はい」

「はーい。行こか、せっちゃん」

「うん」

ドタドタドタと、廊下を走っていく音が遠ざかっていく。

それを確認して、やっと男性の服を強く握ってしまっていたことに気付いた。すぐ離して、私はサササと素早く男性の目の前へと移動した。

「助けていただき本当にありがとうございます。ですが私は多く留まることができぬ身、失礼！」

脱兎のごとく部屋から飛び出――。

「まぁ待ちなさい」

回りこまれた……だと……？

「少し、お話でもしていかないか？」

笑顔で、そう言った。

＊　＊　＊

「つまり、なんですか。私は喋れなくなる術と不老不死の術が施されていたと？」

私の目の前にいる男性、近衛詠春は、にわかに信じがたいことを言った。

「ええ。詳しく言うと、前者は解けたのですが、後者は力が強すぎて、未だ解けていない状態です」

不老不死。

ただでさえ妖怪として長寿の生き物だというのに、不老不死？

……信じられない。

「なんとかその術を解く方法を探してみます。なので、その間ここに寝泊まりしませんか？」

「……詠春さんが良いなら」

「ええ、構いませんとも。娘たちとも、仲良くしてやってくださいね」

こうして、詠春さんとの話は終わった。

九尾の妖怪をここまで受け入れる様な彼が、普通の人間とは思えなかった。

術とかもすぐに見破ったし……。詠春さんは分からないことだらけだ。

＊　＊　＊

夜。

私と言う突然の来訪者に、さすがに部屋は貰えないらしい。
代わりに、さっきの二人と一緒に寝てくれと頼まれた。
詠春さんの願いなら、従うしかない。
しかし寝る前にお風呂に入れと言われた。
水浴びなら幾らでもしてきたが、温かいお湯に入るのは久しぶりだ。
「九尾ってのが名前なん？　うう～ん、なんか、名前と言うより種類やな、それ」
まぁ、実際そんなもんですし。
「なぁこのちゃん。なんならウチらで名前付けてあげへん？」
サイドポニーを解いてバスタオルを身体に巻いた刹那が言った。
刹那はバスタオル装着してるけど、木乃香はすっぽんぽんなのね。
「それはええな！　じゃあ、なんて名前にしようかぁ……」
刹那の提案に嬉々としてのったのがすっぽんぽん娘こと木乃香。
「名前なんて、良いよ、別に……」
「あかんえ！　名前って言うのはとても大事なんや。……狐やから

なぁ」

どうやら本当に真剣に考え始めてしまった様子。

「お嬢様がた、そろそろ入浴してもらわないとお身体を壊しますよ」

「む、それもそうやな。じゃ、頼むわ」

「ええ、任せてください」

巫女さんが三人入ってきた。

「……？」

なんで巫女さんが？

＊　＊　＊

「あぅぅぅぅぅ……」

髪の毛をわしゃわしゃと両手で洗われる。

逆らうこともできず、私はただ唸るだけ。

「痒い所はありませんか？」

「ふああぁ……」

慣れない洗い方で現れるのは、正直言って不愉快だった。
だけど、なんていうか……。癖になりそうでもあった。
「……ココ……ちゃうなぁ。ヨウコ……普通すぎるわ」
隣で木乃香がぶつぶつ呟いている。
多分、私の名前を考えているのだろう。
「……コヨ……コユ、キ？　……そや！　狐雪や！」
「このちゃん、名前決まったん？」
「うん！　ほら、この子銀色の毛並みしとるし、なんや雪みたいやろ？　だから、狐雪や！」
コユキ……狐雪……。私の、名前……。
なんだろう。妙な感情。なにかが湧きあがってくる、感情。
「なぁ、ええや……どうしたん？　なんで泣いとるん？　もしかして、嫌やった？」
木乃香は意外と鋭い子らしい。お湯を被った状態だから、気付かれないと思ったんだけど。
「違う……。違う、んだけど、分から、ない。……でも、なんか、勝手に」

涙が止まらない。

……これは、きっと。

「たぶん、嬉しいんだと、思う」

笑顔で、言った。

嬉しいから、涙が出る。妖怪の私には、到底理解できなかったはずの人間の感情だった。

「……そか。なら良かったわ。ユキちゃん」

「あれ、コユキじゃないの？」

「名前はコユキ。あだ名はユキちゃんや」

刹那の方を見ると、「いつものことだから」という眼だった。見れば見る程に「諦めろ」と言っている様でもあった。

ま、まぁ……いいか！　木乃香が付けてくれた名前と仇名に文句言う立場でもないだろうし。

それに、ユキって呼ばれるのも、なんだか、懐かしい感じがするし……。

「……シャンプーお流ししますね」

後ろから巫女さんがそういって頭を洗ってくれる。

気持ちが良い。

「お身体も、失礼します」

「え、ええ？　か、身体は自分で……」

「いえいえ、私にお任せください」

隣を見ると、木乃香は嬉々として両腕を上げて身体を洗ってもらっている。刹那も羞恥しながらも「仕方なく」という感じに……。

「では……」

ぼでぃーそーぷとか言うのをしみ込ませたタオルで背中をゴシゴシと擦っていく。巫女さんの力加減は絶妙で、痛くなく、気持ちのいい加減具合だった。

「尻尾の方はどうされますか？」

「シ、尻尾はその……」

私は巫女さんの耳に口を寄せて言った。

「人に触らせるとくすぐったいから……自分でやりたい、かも……」

他人に触らせると非常に感度が良くなる。何故かは知らない。

自分で洗った方が……というか、触った方がマシなのだ。

ただ、それを木乃香や刹那に知られるは、何故か恥ずかしかった。

「そうですか。では、失礼して洗わせていただきます♪」

……え？

「っ！？　～～～～～～～～～っ！」

尻尾に触れられた瞬間に身体が強張り、尻尾をゴシゴシされた瞬間に声にならない悲鳴が出た。

＊　＊　＊

「うう～。酷い目にあった……」

そんなことを呟きながら、私は部屋を見渡した。

女の子の部屋にしては可愛らしいものはなく、ある物と言えば化粧をするための鏡だとか服をしまっているのだろうタンスとかくらいしかない。

しかしだからと言って女の子らしい部屋じゃないのかと聞かれれば答えは否。

良い匂いがするのだ。

多分、木乃香の匂い。

「ほらユキちゃん。こっちやえ」

刹那と木乃香は既にベッドの上で寝る準備。

え、私夜行性なんですが。

等と嘯きたがったが、止めておいた。

手招きをしている木乃香に従ってベッドの上に乗る。

「あったかいえ～」

「ほんまやね～」

二人は私の尻尾を布団代わりにした。

いや、なんで！？

そりゃあ私の体温とかあるから普通の布団よりは温かいだろうけど……。

「もふもふや～」

「ほんまやね～」

尻尾を念入りに触るのは止めていただきたい。

声が出そうなのを我慢しながら寝るって厳しいよ……？

しかし、私を襲ったアレ。

アレは、一体なんだったのだろう。

私に施されていたという二つの術。

喋れなくする理由はなんとなく分かる。

喋る狐と喋らない狐。どっちがめんどくさくないのかと聞かれれば言わずもがな。

だけど、不老不死にする理由なんて……。

「……」

止めよう。今は家で寝れるんだ。もしあれが妖怪の類なら、そう簡単に姿は現さないだろうし。

九尾孤の狐雪（後書き）

なんか他の小説読んでたら影響されていつの間にか書いてた。

気付いた時には一話分書き終ってた。

他の小説更新しないでなにやってんだろう俺。

更新は不定期ですので、できればお気に入り登録とか、後はご意見ご感想等欲しいです。自己満足小説だけど、それでも感想くらいは欲しいんです。

この後ぶっ続けで二話投稿するから、シリアスっぽい様な違う様な感じだから。

飼い主との別れ

近衛家に拾われてから数日が経った。

これだけの時間がたてば記憶の混乱なんてものは無いに等しい。

まず私は大妖怪《九尾狐》の子供。しかし既に百年は生きている。

大妖怪というのは大抵、本来の姿か人間の姿かのどちらかで生きていく。私は人間の姿をしているが、本来の姿になれることも確認済みだ。

更に言えば妖怪としての『力（おそれ）』もやっと判明した。

《鬼火》。

それこそが私の力！　と言っても、記憶の混乱があったからか、上手く仕えない。

精々手の上にぽんっと青白い炎を出すくらいだ。

そんな私は木乃香と刹那、二人を背負いながら家の帰路を辿っているところだ。

川まで遊びに行ったのだが、蹴鞠をしていたら鞠が川にぽちゃり。それを木乃香が追いかけて木乃香までぽちゃり。詠春さんに怒られると思いながら追いかけてたら刹那までぽちゃり。

もう私どうすりゃいいのさ的な感じでなんとか二人を救出。

妖怪の腕力とか脚力とか基礎的な力嘗めんな。

早く帰らないと風邪をひいてしまう可能性も否めないため背負って急いでいるのだが……。

如何せん、私は妖怪の力を取り戻したばかり。そんな状態で川を全力で泳いで子供とは言え二人分の体重を抱えて助ければ力尽きるのもまた然り。

そんな時、私の後方から妙な気配が凄まじい速度で――。

――ぞくり。

体中の毛が逆立った。

警戒しろと本能が告げている。

それと同時に、逃げろとも言っている。

「久しぶりだな。子狐」

「……」

咄嗟に後ろを振り返ると、そこには既に大きな『ナニカ』がいた。

炎を纏った剣を振るい、顔には梵字が羅列する包帯を巻いている。

それには見覚えがあった。

私を襲ってきた、妖怪。

「何故私を狙う」

なるべく平静を保ちながら言った。

しまった、と言うべきか。ここは総本山の中でも結界が張られていない山道。詠春さんが助けに来てくれる可能性も少ない。

「何故？　何故だと？　俺の百鬼夜行を潰した九尾組の子供だからに、決まってんだろうが！」

「っ！」

剣を振りおろしてきた。

炎を纏ったそれは私を焼き斬ろうと迫りくる。鬼火を使っての防御？　時間がないとかいう問題では無い。今の私は、鬼火を使いこなせない……！

――どがんっ！

とても剣を振り下ろした時に出る音とは思えない爆発音が鳴った。

私はギリギリ、それを横っ跳びでかわす。二人を抱えているせいか、スピードは出ず、一本の尻尾が少しだけ焼けた。

少しだけ距離を取り、二人を道端に避難させた。

目が覚めてくれれば逃げてくれる。そう信じて。

「私の先祖が貴方の百鬼夜行を潰した？　それと私に、なにが関係ある」

「関係なんてねえし意味もねえよ。ただ、無性に腹が立つ。腹が立つ腹が立つ腹が立つ！　だから、殺す」

豪っと燃えあがる炎を剣を凪払った。炎はまるで生きた蛇のように私を襲う。

それを防ぐ手立ては、残念ながら今の私にはない。

「がっ……ぅ……はな、し、て……」

炎に包まれ、それでも奇跡的に私に火が燃え移ることはなかった。だが、炎が通過した後に待っていたのは男の手。

男の手は、先程の炎同様生きた蛇の様に私の首に噛みついた。

「なぁ。殺されるのは怖いか？　死ぬのは怖いか？」

突然の問い掛け。

首を噛まれ続けている私は答えることができない。

「怖いよなぁ、死ぬのは。だから、お前を……九尾組の生き残りであるお前を殺して、それで仕舞いだ！」

ああ、そうだ。

思い出した。

私は、逃げろって言われたんだ。

お父さんに、お兄ちゃんに、お母さんに……。逃げろって言われて、逃げて。

だけどすぐに追いつかれて、頑張って逃げて逃げて。

時には隠れて。数日を過ごして。

また見つかって逃げて、ここへと迷い込んだ。

「おま、えが……私の、家族をぉ……」

言い知れぬ怒りがこみ上げた。

「ユキ、ちゃん……？」

後ろから声が聞こえた。

だけど私は返事ができない。答えたい。私は大丈夫だから逃げろと。

「ユキちゃん！？」

意識と思考が追いついたのか。私の名を叫んだ。

はぁ……。

溜息が出た。

「うるさいガキがいるみてえだな」

「あぐっ！」

アスファルトに叩きつけられた。

視界が暗転する。

ぐるぐると回る。

「ユキちゃん……！」

視界に木乃香の顔が入ってきた。何故、私の目の前に木乃香の顔があるのだろう。

もしかして、駆け寄ってきたのか？

木乃香は、泣いていた。

なんで泣いているのだろう。

なんで。

なんで……。

「うっ……このちゃん……？　……っ！　このちゃん！！」

刹那の悲鳴にも似た声が聞こえた。

でも、その声は異様に遠かった。意識が混濁して、落ちそうになる。

刹那はなんで叫んだんだろ？

もう一度、眼をしっかり開ける。そこには――。

剣を振り上げた、アイツがいた。

「なに、を……」

まさか、木乃香ごと私を斬ろうというのか……？

……　　また護れないのか。

家族を捨てて、逃げて逃げて逃げて。

その先に待っていたのは、後悔なのか。

なにもできない無力を呪う。

鬼火を出せない狐はただの狐だ。

なにが大妖怪だ。

なにが。なにが。なにが。

大妖怪の子供だ。

私は、また、護れない――。

「また、護れない？」

口に出したその声は、何故か疑問形になっていた。

体中が煮えたぎる様に熱い。

木乃香の後ろに立つ男は何故剣を振り落とさない。

なんで、木乃香の眼から流れ落ちる涙はこんなにも遅く流れる。

重力働け。

そう嘯きながら、私は、全力を持って木乃香を刹那のいる方向へと突き飛ばした。

「きゃ？！」

木乃香の小さくて短い悲鳴と共に時間は戻った。

豪っとうねりをあげて炎纏う剣は下ろされる。

また、爆発音。

だが、私だって負けられない。

負けられないんだ。

護るべきものを守ってこそ、妖怪の誇り！

「家族を護れなかった……！　だから、今度こそ護る！　九尾狐の誇りに誓って、護ってやる！」

相手が豪なら、私は剛。

「護るべきものを護れなかったお前がぁ……私の誇り（畏れ）に敵うと思うなぁあぁぁあ！」

叫びながら、私は手に持つそれで相手の剣を受け止めていた。

『九尾狐家宝剣《狐火の太刀》』。

鬼火を纏った剣。鬼火を纏わせるのは私の父親の技の真似ごとだけど、だからこそ、これの強力さは心得ている。

私の放つ青白い鬼火は柱を作った。

天と地を繋ぐ一本の柱に。

「ぬっ……こ、んなの……聞いて、ねえ……！」

父さんの、秘技だ。ピンチになったとき以外使うなと、そう教えられてきた。

この技の危険性くらい、子供である私にだって分かる。だけども、

今ここで使わずしていつ使うのか。

「……あぁあぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁぁあああ！！！！」

大声を出せば力も自然と入る。

そういうものだ。剛っと青白い炎が揺れる。

「くそったれ、がぁあああ！！」

男も叫ぶ。だが既に限界にまで腕力を振り絞っていたのだろう。あまり力は変わらない。

男の剣を全力で弾いた。

剣はくるくると周り、恐らく最終的にはこのアスファルトへと落ちていくだろう。

ならばその前に片を付ける。

また、スローモーションの世界。

包帯の隙間から見える目には明らかな驚愕が映っていた。

跳躍し、《狐火の太刀》を振り上げ、男の肩から腹にかけて、袈裟懸け切りをした。

時間は戻り、アスファルトに剣が突き刺さると同時に男は倒れた。

《狐火の太刀》は鬼火に包まれ姿を消していった。

体中が痛い。ちりちりと、なにかに蝕まれる様に。

その痛みの中、私は意識を失った。

＊　＊　＊

どこか遠くから匂ってくる自然の香り。小鳥の囀りは聞こえないが、それでもデジャヴを感じせざるを得なかった。

意識が半分飛んでいる中、私は身体を起こす。

キョロキョロと部屋を見渡す。

化粧棚。服収納用のタンスらしきもの。どうやら木乃香の部屋らしい。

しかし部屋の主はいない。その友人も同じく。

疑問に思いながら、床に足を下ろす。

「ふぉぅふ……っ」

床の冷たさが全身を駆け巡った。

それと同時に、体中が痛くなった。

見れば、私は全身に包帯を巻かれ、着ているのは下の袴のみとい

う格好だった。上はサラシの様に包帯を巻かれているし、腕にも巻かれている。首にも頭にも、包帯がないところはないんじゃないかと錯覚するほど、包帯が巻かれていた。

こんな大怪我、いつ負ったのだろうか……。

凍える様な寒さの中、私は廊下を歩く。

廊下はギシギシと音を鳴らす。なんかおかしい。前までこんなにギシギシ鳴る様な廊下では……。

まぁ、いいか。変化とは突然やってくるものだって言うし。

「……あ、御鈴」

御鈴とは木乃香の世話係の巫女さん。

その御鈴が、私を見て固まっていた。

「……？」

「あ、ああ、……え、詠春様ぁぁぁあ！」

！？

なんか逃げた！？

いや、詠春さんの名前を呼んだってことは……。

「これ、御鈴。どうしたというのですか、そんな大声をあげ……て……」

詠春さんまで、私の存在を確かめると口を開けて固まった。

あれ、なんか詠春さん、ちょっとだけ老けてない？

ていうかなんか後ろからひょこひょこジャンプしてるちっこいのは誰よ。

「コユキ、眼が覚めたのですね。良かった」

「うわぅ……。え、詠春さんなにをあぶぶぶ」

抱きしめられた。

何故。ほわい？

「なぁ詠春はん。幾らコイツが娘みたいな存在で、眼が覚めて嬉しかったからって、いきなり抱きしめるはないやろ」

「あなたは娘を持っていないからそんなことが言えるのです。まったく……」

もうなにがなんだか分からない。

私の頭はショート寸前。

＊　＊　＊

「えっと、それはなんていうか……。私、もう五年近く寝てたんですか？」

詠春さんの話を信じたくないと思ったのはこれで二回目だった様な気がする。

木乃香は九歳となり、麻帆良と言う東の学校に通わせたらしい。

つまり私は置いてけぼりと……。

「そんな寂しそうな顔をしないでください。この前こちらで保護することになった小太郎君もいることですし」

「こたろー？」

「おう、俺のことや。ガキのおもりは好きやないんやけどなぁ……」

「む……誰がガキか！」

「お前以外におらんやろ！」

「私はこれでも百年近く生きてますー」

「なん、やと……」

＊　＊　＊

あれから、私は木乃香のところに行きたいと言ったのだが、急過ぎるし格好的にまず無理とのこと。九つの尻尾が憎い。

「お前の尻尾便利やな。大きさ自由に変えられるとか、まじええわ」

ちなみにその憎き尻尾は絶賛枕ｏｆ布団になっている。こたろーめ……。

＊　＊　＊

鬼火が未だに使えないことに気付いた。

畏れは体力を使う故、まずは体力づくり。

こたろーの修行に加わってみたのだが……。

「こたろー。待ってよー……」

「は！？　アホか！　なんでお前なんか待たなきゃいかんねん！」

とまぁ、私はこたろーに付いていけず……。

ていうか、階段の上り下りを駆け足で千回とか無理ー……。

「お前妖怪なんやろ？　自慢の体力と基礎力どないしたん？」

「知らないよ。ずっと寝てたから、常人並の体力になっちゃったのかも……。脚力とかなら、一応まだ残ってるけど」

そう言って、一気に高い木のてっぺんまで跳躍する。

「そこまで一気に行く元気があんなら走れー！」

「ええー！　まだやるのー！？」

もう私のライフは零よ！

＊　＊　＊

「ほぅ。なんや、お前の畏れはその青白い火なんか」

「青白い火じゃなくて《鬼火》。覚えてよ……」

なんでか知らないけどお互いの畏れを見せ合いになってた。

「こたろーのは？」

「あ？　俺のか？　俺のはこれや」

そういうと、こたろーの影からわんこが数匹……。

「犬ちゃうわ！　狼や狼！　罰や、……少し遊んで来い」

「わん！」

いや、犬じゃん……って、ちょ！

「うわはははははは！！　や、止め！　くすぐったいの苦、手だから！　ほんと、やめ！　ああっはははははは！」

「おお。効果は抜群やな」

後でこたろーを血祭りならぬ火祭りにあげてやろうと思った。

＊　＊　＊

小太郎は狗族と人間のハーフなんだとか。

狗族と言えば、烏族と並ぶ妖怪界の大スターではないか。

なんらかの組に入ることなく、同じ種類同士で集まった戦闘集団が烏族。

同じく組にまじることなく、同じ種類同士で集まり、暗殺などを専門に請け負う組織が狗族。

「まぁ、そうは言っても俺は産まれてすぐに追い出されたんやけどな」

どうしても拭えない、人間と狗族の壁、なのだろう。

しかしそれを言ってるこたろーは苦しそうでも、悲しそうでも、ましてや寂しそうでもなかった。

ただ淡々とその事実を言ったこたろー。その淡々とした態度が、隠しているという事実をなによりも物語っていた。

「こ、こたろ……もう、ほんと、ム……リ……」

ばたんきゅー、とは正にこのこと……。

「なんや弱っちい弟子やなぁ。まだ階段上り下り七百回目やぞ？ラストスパートや、がんばりぃ」

いつの間にか、こたろーと私は師弟の仲となっていた。

こたろーが使う我流・狗神流は私には手の余るものだった。だから自分の畏れを使った私の我流を作った。もちろんこたろーの付き添いのもと！

こたろーは強さを求める私を謎に思っていたらしい。

「なんでお前はそんなに強さを求めるんや？」

だから、そんな質問をされた。

「こたろーこそ、強さを求める理由あるの？」

こんなふうに切り返して誤魔化したけど。

勿論答えは「最強になるんや。俺は強なって、今の世の最強と戦いたいんや」だったけど。

最強……ねぇ。

で、私が強さを求める理由と言えば、それは至極単純明快なことだ。

私が護りたいものは私が護る。それが私の誇り。

そして、木乃香の元に、行きたい。木乃香を護りたい。刹那も、護りたいし、御鈴や、私の世話係の御鞠だって……。こたろーだって、護りたいし、詠春さんも護りたい。

だけど、今の自分を見れば……どうだ？　私は護るどころか、護られている。

こんな自分が嫌で嫌で堪らないから。なにより、あの九尾孤家宝剣《狐火の太刀》を、扱えるようになりたいから。

あの時の大怪我。あれは、自滅だった。

青白い炎は術者であるはずの私すら焼いた。

それは単に（ひとえ）、自分の鬼火（おそれ）をまともに扱えていない証でもある。

なら、修行する他にないでしょ……？

飼い主との別れ（後書き）

あるぇー・3・

早速飼い主である木乃香と突き放しちゃったよー？

まぁ、自己満足小説だしいっかー。

次からマジ不定期更新です。気長に更新待ってくれたら微妙に嬉しいです。

連れ去られた子狐（前書き）

文が非常に拙い。
まぁいいか。

連れ去られた子狐

こたろーと共に暮らす四年ばかりの時間はあまりにも早かった。

その間にも、私は元の『九尾狐』としての力を取り戻していき、畏れである《鬼火》の扱いも十分になっていた。

そんなある日、こたろーが言ってきた。

「最後の修行や。俺と試合や。俺を本物の敵やと思って来い。ええな？」

「……？　うん……」

最後の修行、という言葉が気になったが、修行とくればやる他にない。

こたろーと私は森の中へと入っていき、少し広い所に出た。そこでこたろーは足を止めて、私を見た。

「ええか？　全力で来いよ。普通なら女を殴るんは趣味やないんやけど……まぁ、お前なら大丈夫やろ」

それどういう意味……。

まぁ、いいか。幼児体型でなに言っても……ね。

小太郎は構えを取った。

重心を前に持っていき、右手は握りこぶし。左手は開きっぱなし。

すぐに悟った。始まり一番に突っ込んで左で私の気を逸らさせる。そしてその隙に右を身体に減り込ませる。

……他にも、こたろーが取ってくるだろう行動パターンを考えた。

しかしこたろーは直感型。なにより突進型。この場合……。

「はじめや！」

ずばんっという爆発音にも似た音をあげ、地面を蹴った。

こたろーは一瞬姿を消した。

瞬動……！

なら、次の瞬きを終えた瞬間にこたろーは私の目の前にいることとなる。

思考を加速させる。

瞬動の弱点。それは一度突っ込んだら、そう簡単に方向転換ができないことにある。

だからと言ってカウンターを喰らわせる程の直感は私にない。故

に、ここは逃げるという選択をした。

静かに地面を蹴り、木の上に立つ。

「オラァ！」

どがんっという音を立てながら気がへし折れた。

……こたろー、本気？

気が折れた理由は簡単。こたろーが、木を殴ったから。

「……どんだけー」

木の上から跳躍してこたろーの後ろを取る様に着地。

手を地面に付き、『四足歩行の獣』の体勢になる。

それから、畏れを発動。鬼火を足に纏わせ、更なる脚力アップ。

さっきの静かな跳躍とは真逆に、今度はこたろーと同じ、爆発音を立てながら突っ込んだ。

「ちっ……」

こたろーが舌打ちしたのがよく聞こえた。

足を地面に滑らせ、こたろーの一歩手前で、足を地面に減り込ませることで急停止。そのまま鬼火を纏った拳を真っ直ぐ振り抜いた。

ずがんっと。銃声の様な音がした。

しかしこたろーはそれをしゃがむことで回避したらしい。

今の音は、空気を殴った音らしい。

ともなれば私の懐はガラガラ。無防備も良い所だった。こたろーは既に攻撃の体勢に入っている。

回避は足が地面にめり込んでいるため不可能。

技後硬直のため、防御も不可。

しかし、こんな状況の為に、私は畏れの扱いを修行してきたんだ！

「《九尾の太刀》！」

私の九尾は大小変更が可能。大きくすれば、それに伴い長さも増える。

その九つの太刀を、こたろーへと向けた。

「うぉ！？　とと……、あぶねえあぶねえ。忘れとった。そういや、その尻尾は変幻自在やったな」

腕をクロスしてガード。

こたろーの反射神経すごすぎ。さすが、ハーフと言えど狗族なだけはある。

鳥と鬼と狗。それに並んで狐。四大妖怪だと教わってきたけど、実際狐がその中に入ってるのか分からない。

「それも、気かなんかで強化しよったか？」

「気じゃないよ。私はそんな大層なもの持ってないもん。使えるのは妖力と畏れだけ、だよ」

まぁ、妖力と気の違いは知んないんだけど。

「っは！　そうやったなぁ！」

吹き飛ばされたこたろーは体勢を変え、木の幹を足場にするように、こちらに突進してきた。

「鬼火！　《百鬼の灯》！」

青白い、手に乗るサイズの炎を五十個、生み出した。

「なっ……！　こんだけ多く出せるなんて聞いとらんぞ！？」

「そりゃそーだよ。言ってなかったもん。さぁ、ちゃんと避けてね師匠（、、）！」

「っ……。上等ォ！」

空中で足場を作り、瞬間的に移動する歩法……所謂、虚空瞬動を使って五十の鬼火を掻い潜っていく。

ここまで予定通り。そして、私の計算通りに行くならば、こたろ

ーは空中へと身を乗り出す！

――ババッ！

学生服を靡かせながら、空中に身を舞上げた。

こたろーは真っ直ぐ私を見下ろし、今にも虚空瞬動を使ってきそうだ。しかし、それで良い。

地面であれば、地面をければ良い。

だが空中ともなれば『足場を作る』という、瞬動までの過程が一つ増える。その過程を作ることこそ私の狙い。

空中で待っているこたろーに向かって、まぶしい太陽を遮る様に手を翳した。

「蹂躙せよ。業火の覇者。邪の極み。畏れよ！　《鬼火地獄》！」

《鬼火》を翳した手へと集中させる。詠唱と共に《畏れ》は集まり、技の名と共に放射。

一見すれば、青白い炎の火炎放射。

「……」

やったかと思えた。

だけど、いつまで経ってもこたろーは降ってこない。

逃げられた？

――ドカッ！

「あぐ……？」

後ろから首を殴られた。

そう理解が追いつくまで、そう時間はかからなかった。

どさりと前方に倒れる。

「おい、大丈夫か？」

こたろーが倒れた私の身体を起こしてくれた。こう言う時、小さいからだって便利。

「やっぱり、敵わないね……」

「なに言うとんねん。しっかり届いたで」

そう言って、こたろーは左腕を見せつけてきた。

左腕は、袖がなくなっていて……火傷を負っていた。

「強なったな。コユキ」

「……えへへ。ありがと、こたろー……」

それだけ言って、私は気を失った。

＊　＊　＊

最近、気を失うことが多い気がする。

そんなことを考えながら上体を起こした。

「おや、眼が覚めましたか」

私のすぐ横に詠春さんがいた。良かった。今回は数年間気絶してましたなんてオチはないらしい。

「……こたろーは？」

「……出ていきました。なんでも、『今まで楽をしすぎた。これからは一人でも生きていける様になる』とのことです」

なにが、楽だ……。

狗族の里を追い出されて、それで、今まで十分一人だったのではないの？

「彼は、強くなりたいんです。男とはそういうものです。彼が戻ってくるのを、待ちましょう」

詠春さんはそう言った。

だけど、詠春さんの顔からは、「辛い現実。時と記憶の茨に埋め

るのが良いでしょう」と言っているのが分かった。つまり、こたろーは戻ってこない……。

「……そうですね」

そんな気を使ってくれる詠春さんに、「気を使うな」と言いたかった。

けれど残念。私はそんなことも言えない小心者だった。

＊　＊　＊

「コユキ。どこにいますか？　コユキー！」

結局木乃香の部屋は私の部屋となった。

まぁ、木乃香が帰ってくるまでの番だよ。

襖を開けて廊下に出ると、詠春さんとすぐに目が合いました。

「ああ、やはりそこにいましたか」

「それより、なにかありましたか？」

「ええ、朗報です！　あなたも、麻帆良にいけますよ！」

「……？」

耳が垂れる。思考的には「まほらってなんだっけ？」。

「……！」

耳が立つ。「麻帆良と言えば、木乃香のいるところ！」。

「……？！」

耳とか毛が逆立った。心情的には「マジで！？」。

「ほ、本当ですか！」

「ええ、本当ですとも！　今すぐにでも向かいましょう。外で車が待っています。服なども、御鞠がまとめてくれました」

それを聞いて、私はやっとそれを信じられた。

夢なんじゃないかとも思ったけど、夢の割には思考がまとも。

じゃあ、やっぱりこれは現実で……！

「うわぁーい！」

等と無意識のうちに騒いでしまっているのも現実で。

「ありがとうございます、詠春さん！」

最終的には飛び跳ねて、詠春さんに抱きついたりしちゃってたりしたような気がしなくもない。

＊　＊　＊

～Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ～

黒塗りの車に乗り、暫しの間揺らされる時間が過ぎる。

当初は初めて乗る車から見える光景にはしゃいでいだコユキも、今では小さな口から涎を垂らして深い眠りへと落ちてしまっている。

「ふふ、堪忍なぁ。コ・ユ・キ・ちゃん♪」

運転手は、最初は麻帆良へと向かっていたのだが、突然のユーターン。

メガネをかけた女性、天ヶ崎千草たちの陰謀は既に始まっていた。

＊　＊　＊

海の波が奏でる優しい音を遠くに聞きながら、コユキは目を覚ました。

身体を伸ばそうとして、腕が動かないことに気付いた。身体を三枚の札が貼られた縄で縛りあげられ、港にある暗い倉庫の柱に繋ぎとめられていた。

「な、なんで……」

少しの間考えたコユキは、自分の不確かな記憶を辿るより、自分の確かな腕力で縄を引き千切り逃げることが最優先のするべきことだと考えついた。

しかし、千切れない。

縄はギチギチと擬音を立てるだけで少しも千切れそうにない。

縄に貼られた三枚の札。

左側にある札が物体の強化。

右側にある札が妖力の封印。

真中にある札が対象の弱化。

対象はなんなのか。それは言わなくても分かると思うが、コユキである。

陰陽師の道に携わっていないコユキにそんなことが分かるはずもなく、ただ必死になって縄を千切ろうともがき続けた。

＊　＊　＊

その頃、詠春はと言えば、そろそろ麻帆良に着く頃だろうと近右衛門に連絡を取っていた。

「それがのう、まだこんのじゃよ……。麻帆良は無駄に広いから、どこかで迷っとるのかもしれん。刹那君に探させよう」

「はい、お願いします」

電話を切った。

嫌な予感がしていた。なにか不穏なナニカが起こるのではないかと。

そして、その予感は、裏切られることなく、そして既に、起こっていたのであった。

＊　＊　＊

学園長室に呼ばれた二人は、近右衛門の話をただ真摯に聞いていた。

ただ、サイドポニーに髪をまとめた少女は、肩を震わせ、心に広がる喜びと、逆に、どうすればいいのかという困惑に包まれていた。

「どうしたのじゃ刹那君。昔の友人の眼が覚めていた上に、君の目の前に来ているのじゃぞ？」

「学園長。刹那は木乃香相手にでもアレなんだよ？　旧知の友人がどんな人なのか知らないけど……」

「た、龍宮……」

「むぅ……そうか。ま、とりあえずじゃ。早急に狐雪君を見つけて

いただきたい。良いな」

「はいっ」「はい」

刹那は勢いよく学園長室を出ていった。

「ふぉっふぉっふぉ。元気じゃのう」

「……そうですね。少なくとも、あんな刹那は初めて見る」

褐色肌の少女、龍宮真名はニヤニヤした笑顔で刹那の背を見送っていた。

＊　＊　＊

縄を千切るのは不可能。

そう理解したコユキは寝ることにした。マイペースである。

「……まだ目を覚まさへんのか？」

「いや、先程まで目を覚ましていたが、諦めて寝てしまったようだ」

「ちっ……」

逃げてくれればいいものを。

千草は意味の分からない焦燥感に駆られた。

なにを考えているのだ自分は。対象に逃げられてしまっては全てが水の泡。逃がすわけにはいかないのだ。

そう言い聞かせた。

「それより、本当にあの口実でいけるんやろな？」

「ああ、大丈夫だ。それにしてもいい幼女だな。少し舐めたい」

「ロリコンも程々にしとき」

「ロリコンじゃない。フェミニストだ」

千草はジト目で上司を見てから、もう一度コユキが映っている画面を見る。

そこには相変わらず寝ているコユキが映されるだけだった。

＊　＊　＊

「なんですって！？」

朝早い時間から、詠春の怒号が木霊した。

「迂闊じゃった。もっと早くに確認せんかったわしの落ち度じゃ。すぐに狐雪君の妖力の残留などを調べておる」

「お義父さん……」

「わしを責めるのは良いが、それだけでは状況は変わらん。説教はまた後で聞くとしよう」

「分かりました。こちらでも調べられることはできうる限り調べます。では、失礼します」

近右衛門の返事も待たず、詠春は電話を切った。

それから自分の後ろに並んでいる巫女に命令を告げた。

「コユキは麻帆良内にすら足を踏み入れていないらしい。監視カメラや事務員、麻帆良学園入口の開け閉めを担当している方々全ての証言が一致したらしい。

……昨日車を運転していたのは誰か分かる者はいるか！？」

「……」

「……」

誰も分からないのか。手を挙げようとする者など、いなかった。

（くっ……。誰に運転を任せたのかくらい、確認するべきだった。これは、私の落ち度でもありますね……）

詠春が後悔している、その時。

「あ、あの！」

今にも掻き消えそうな声で、一人の巫女が言った。

「昨日の運転手役は天ヶ崎千草という、過激派の女性だったらしく、て……」

「その情報は確かですか！」

「うひゃ！？　は、はい……」

思わず詠春は彼女に詰め寄っていた。

それから考え事を数秒してから、彼女らに、今度こそ命令を告げた。

「東の者たちはコユキの妖力を知らないはず。恐らく、向こうが調べても遅くなる……。これから本山総出で捜索に当たります！　宜しいですね？」

「「「はいっ！！」」」

＊　＊　＊

倉庫の中に広がった塩の匂いで目が覚めた。

そしてまるで狙ったかのようなタイミングで（実際狙ったのだが）天ヶ崎千草ともう一人、冬賀峰咲朗が姿を現す。

「……誰？」

「我等が誰なのか、それはどうでもいいことだ。それより君の足を少しなめさせて――」

「変なこと言うなや！」

「あ、足……？」

狐雪の危険アラームが鳴った。主に変質者注意的な意味で。

スーツを着た男と和服を着て肩を開けさせている女。

「それより、上手くいくんやろうな？」

「ああ、いくにきまっているだろ」

「……なにが上手くいくの？」

咲朗は口角を上げ、言った。

「君の魔力は皆無であり絶無だ。だが、純粋な妖力に関しては莫大……」

「だから？」

千草が咲朗の説明を受け継いだ。

狐雪の顎をくいっと持ち上げながら舐めまわす様な目で言った。

「その妖力、分けてくれへん？」

子狐紹介

・プロフィール

名前：近衛　狐雪（こゆき）

外見：東方の藍様を幼児化させて白くさせた感じ。或いは椛を幼児化させて九尾にした感じ。

瞳色：琥珀色

髪色：白

年齢：百年以上

身長：一一〇？

体重：二八，三

性格：寂しくて死ぬのはウサギだけじゃないという良い例。基本は明るく、外見相応の態度。妖怪だからか人に悪戯するのが楽しみ（近衛家では悪戯はしない。なぜならそこに恩があるから）。

得意・好物：木乃香。詠春。刹那。油揚げ（というか揚げ物全般的）。入浴。悪戯。昼寝。

苦手・嫌物：寂しい状況。爬虫類。自分を受け入れてくれない人間。酸っぱい食べ物（くしゃみが止まらなくなる、一種のアレルギー持ち）。

・現在確認済みのアビリティ

能力：鬼火

：鬼火の灯

最大で百の鬼火を空中に出現させる。一～百までなら数の調整は自由。百以上の灯を出現させると火力が小さくなるため攻撃としての意味を成さなくなり、それはただの《明かり》にしかならない。

：鬼火地獄

鬼火を手に集中させ、火炎放射の如く相手を焼き尽くす。無詠唱での放射も可能だが、火力が極端に落ちる。

武具：狐火の太刀

鬼火の力を引き立たせるための剣。九尾孤の家宝であり宝剣。力の制御を失うと暴走。術者の妖力が続く限り鬼火を最大放出させてしまう。その鬼火は術者自らも傷つける故に、要注意。太刀は本来家宝として祭られているが、『白面金毛九尾の狐』の一族はその太刀とパスが繋がっているためいつ何時でも取り出せる。

外見は一般の太刀と同じ。

子狐紹介（後書き）

当初の予定で、狐は幼児体型（一歳六カ月の平均的成長具合）にしようと思ったんだけど、それじゃあ小太郎と張り合えるわけがない（身長差的に）。だから少し成長させて身長を１１０センチに繰り上げました。７７センチから繰り上げたので３０センチ以上背が高くなりました。

……身長が伸びたよ、やったねユキちゃ（おい止めろ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9644z/

木乃香のペット！

2011年12月31日01時45分発行